



Don Quijote, Vol.42 montado en un avión

IOLE! スペイン各地での
エピソード⑤

「ハボン」の 姓を持つ スペイン人

texto: Takeshi Shimizu
fotos: Atsuko Yokoyama

Sevilla

セビリアの近くに「ハボン(日本)」との姓を持ったスペイン人が600人余りいるといえます。約400年前、支倉常長の使節がここに寄航してしばらく滞在。その後、何人かが居残って以来、ハボンの姓が世代を越えて続いてきているというのです。マラガ大学で歴史の先生に確認すると、親切にもそのことを報道した新聞のコピーを持ってきてくれました。「エル・パイス」(有力な全国紙の一つ)の1996年10月27日(日曜日)付け。



「エル・パイス」の紙面

「セビリアの日本人?」とのタイトルで、1ページにわたって特集していました。タイトルの上部には、支倉常長の銅像をバックに、ハボンとの姓を持つ少年が写っています。誰が見てもわかるような日本人の面影です。さらにハボンの姓を持つ著名な3人が顔写真入りで紹介されていました。フットボールの審判、元文化参事官、ミス・スペイン。記事は382年前、支倉の一行がこのコリア・デル・リオに寄航したこと。現在、602人のハボンの姓を持つ市民がいる(人口23,600人)。前日には、マドリッド駐在の日本大使も来て、記念の行事を祝った。そして、支倉の寄航と宮城県から銅像が贈られたいきさつ、さらにハボンとの姓を持つ人のコメントを載せています。セビリア市内からタクシーで20分。グアダルキビル川上流のコリア・デル・ソルの公園にある銅像の前に立ちました。銅像は台座と合わせて高さ5メートルほど。2本の刀を腰に、支倉常長はグアダルキビル川に向かってきりりと顔を引き締めています。台座にはスペイン語と日本語で、そのいきさつが彫り刻まれています。

<日本語の文言>

——この銅像は、当地に上陸した仙台藩士支倉常長一行の偉業をたたえるとともに、1991年に実施した「第2回みやぎ創造の翼」の青年団員と貴州市民との交流の記念として、親愛なるコリア・デル・リオ市民に日本国宮城県が贈呈するものです。使節一行は、1623年10月28日仙台藩主伊達政宗の命を受け、仙台領月の浦(宮城県石巻市)を出港、イスパニア国王に交易を求めめる正宗の書状を携え、1614年10月12日当地に上陸したものです。

1992年6月 寄贈 宮城県知事 本間俊太郎 制作 佐藤忠良

スペイン語の文言は、基本的に内容は同じですが、これより詳しく長くなっていて、その部分を付け加えると、当時の状況がよりわかります。

<日本語に無い部分の概訳>

——使節はメキシコに寄り、スペインの沿海を通り当地に寄航、この村の人々の熱い歓迎を受けた。10月23日、セビリア市に到着。スペイン国王に書状を献呈後、フランスを通過しローマに向かった。



支倉常長の像

ここで1615年11月3日、パウロ5世に謁見。その後セビリアに戻り滞在、1617年7月4日、日本への帰国の途についた。

日本語とスペイン語の文言の間には、一行の往復の航路を示す世界地図および日本近海と地中海の拡大図が描かれていました。

「エル・パイス」の記事によれば、支倉の帰国に際し10人以上がそのまま残った。そこからハボンとの姓が誕生したものだといえます。現在ハボンの姓を持つ市民の感想では、「その血筋、いわれを誇りに思う人」「なんとなく親密感を抱く人」「支倉等の歴史について全く知らなかった人」「どちらでもいいと余り関心を抱かない人」等、さまざまであり、世代が移り、その表情・体型が日本人の面影を残している人は少なくなっているようでした。

とはいえ、コーヒーを頼んだカフェテリアの太った年輩のおじさんが手を広げて言ったものです。「そう、オレたちにとっても、勇敢なサムライの子孫がいるというのは誇りでもあるよネ。ここにも日本人が観光でいっぱいやってくるし…」

清水武 Takeshi Shimizu 旅行作家
世界文学紀行を定年後のライフワーク
に作品の舞台を訪ねている。
東京都 昭島市在住
<http://homepage2.nifty.com/donky/>